

本号のテーマ：「勝敗を超えた価値」

東京オリンピック開催まであと1年を切り、入場券の販売も始まった。チケットの応募者はなんと512万人で（当選者は96万人）、世間ではオリンピック熱が否応なしに高まりをみせている。また、このところの若い日本人スポーツ選手の活躍には目を見張るものがある。陸上男子では3人が100mで10秒を切り、テニス女子では全米オープン全豪オープン優勝、野球やバスケのMLBやNBAでの活躍、さらについて先ほどゴルフ女子での全英オープン優勝の知らせが入ってきた。いずれの大会や舞台もまさに世界最高峰であり、一昔前までは、日本人選手が出場すること自体が夢であったことを考えると、まさに今昔の感がある。

他方で、スポーツが持つ負の面も昨年以来、表に出てきている。いわゆるパワハラ問題が、レスリング、アメフト、女子体操、アマチュアボクシング等で大きな話題を提供し、体罰問題もひっきりなしに報道されている。これらはいずれも指導者側の強圧的指導に問題があると思われるが、これを見逃さない世間の価値観の変化もあるように思われる。

こうした中、信濃毎日新聞に、「五輪 勝敗を超えた価値の共有を」という記事が載った。筆者は、スポーツライターの小林信也氏である。氏はこう述べている。「結果よりスポーツの楽しさ、深さを味わう価値観を認め合おう」「スポーツ界は、かつて信じた根性論、強圧的指導を社会規範の変化で見直す宿命にある。…『勝利至上主義』『商業主義』を脱し、『勝敗を超えた価値』を共有することがこれから1年の日本スポーツ界の大きな課題であり挑戦である。それこそが、東京五輪の成否を測る基準であり、国民全体で目指す目標ではないだろうか。」。まさに同感である。熱狂の渦に身を投じながらも、結果がすべてではない、メダル数がすべてではない、スポーツには勝敗を超えた価値があり、そこにスポーツの深さがあるということを肝に銘じて、平昌五輪で小平奈緒選手がライバルの李相花（イサンファ）選手にそっと寄り添い肩を抱き互いに健闘をたたえ合ったように、厳しい競争を経た先にある感動あふれる美しい光景が数多く生まれることを心から期待したい。

なお、付け加えるならば、教育に携わる者としては、「子どもたちに備わっている感動する心」＝「感性」を大切にし、さらにそれが学びの面でもスポーツの面でも存分に発揮されていくことに腐心したい。そのためにはまず大人（教師）が、「センス・

オブ・ワンダー」の著者レイチェル・カーソンのように、子どもたちには「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見張る感性）」が生まれつき備わっていることを自覚し、子どもたちと一緒に自然を探索しスポーツに勤しみ、未知なものや神がかり的シーンに感動する心を持ち続けなければと思う。東京オリンピックが、子供たちの心に大きなインパクトを残すことは間違いない。大人（教師）として、これをどう迎えるか今から心の準備をしておきたい。